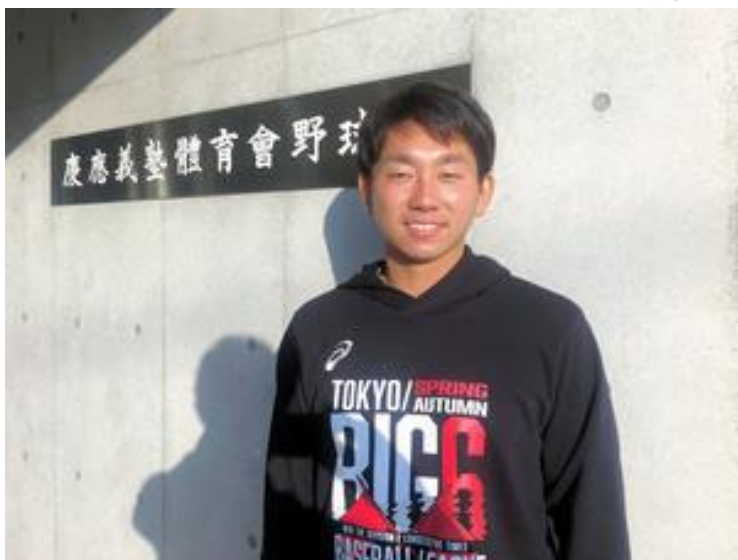


「史上最高」の主将が 社会人野球を選んだ理由

福井章吾・前主将 特集

慶大の野球部主将として昨年の春、秋の東京六大学リーグ戦を制し、6月の全日本大学選手権でも優勝した福井章吾捕手（22）は、次なる舞台に社会人野球を選んだ。

社会人野球のトヨタ自動車へ進む慶大の福井



トヨタ自動車入りする福井章吾。慶大の寮の前で



高校時代から「大阪桐蔭史上最高の主将」と言われ、注目を集めてきた。

周囲やファンから「プロに行かないの？」と質問を多くもらったという福井だが、プロ志望届を出さなかった。社会人野球に進もうと思ったのには、いくつか理由がある。

多くの野球少年がそうであるように、福井も野球を始めた頃から高校生の途中までは「プロ野球選手になりたい」という夢を持っていた。

大阪桐蔭高では下級生のころから試合を経験。決して目指せない舞台ではなかった。

しかし、**2人の後輩の存在**が、その夢を軌道修正させたという。

大阪桐蔭高で1学年下だった、根尾昂（中日）と藤原恭大（ロッテ）だ。

「あの2人はとんでもなかったっす。あいつらが1年生の秋くらいですかね。バッティングの飛距離のレベルが違う。ライトのネットなんて軽々越えていくし、センターの奥にある工場までぶちこむ。こんなんいるんだなって」

毎年のようにプロ選手が輩出する大阪桐蔭高にあっても、2人の存在感は圧倒的だったという。

「こういうやつがプロに行くんだなって思いました。僕も下級生から試合に出て、順調にはきていましたけど、あいつらが実力をつけるにつれて、鼻をパキッと折られました」

福井には自分を育ててくれた**野球界に「何かを残したい」**という目標がある。

それをかなえる方法は大きく二つあると考えている。

一つは「大谷翔平選手や鈴木誠也選手のようなスター選手になって、子どもたちに夢を与えること」。

もう一つは、「野球の指導者になって、選手を育成し、素晴らしい人材を世に出していくことで、



『野球っていいスポーツなんだよ』と世の中の
人に知ってもらおうこと」だ。

バットを振る慶大の福井。昨秋のリーグ戦は早慶戦
で優勝を決めた。早大の投手は大阪桐蔭高でバッテ
リーを組んだ徳山

大阪桐蔭高では西谷浩一監督、慶大では大久
保秀昭監督、堀井哲也監督と、「人生の師」と言
える指導者に恵まれた。いつしか、「指導者にな
りたい」という夢が、プロ野球選手よりも先に
立つようになったという。

もちろん、まずは選手として高校、大学に続き、社会人でも日本一になることが目標だ。今月
9日、トヨタの野球部寮に入寮。大学まで着慣れた紺色のアンダーシャツからトヨタの赤に変え、
社会人野球をスタートさせた。(山口史朗)

朝日新聞
DIGITAL

福井章吾・前主将インタビュー

前編

大阪桐蔭、慶大を優勝させた組織作り 2022年1月12日

彼が主将になると下級生が泣く

大阪桐蔭高で2017年の選抜大会を制し、「大阪桐蔭
史上最高の主将」と呼ばれた福井章吾さん。慶大で
も主将として春秋のリーグ戦優勝、大学選手権制覇
を果たした。社会人野球でプレーを続ける福井さん
に、主将として悩みながらも突き進んだ昨年を振り
返ってもらった。

昨秋の東京六大学リーグ戦の早大戦後、大阪桐蔭高のチ
ームメイトだった早大の徳山(左)、岩本(右)と記念撮影
する慶大の福井



——11月の明治神宮大会は準優勝で、惜しくも
「4冠」は逃しましたが、最後の整列では笑顔でしたね。

「やりきった」という達成感がありました。これだけやって負けたなら仕方ないと思えるくら
い、積み重ねてきた自分への自信が、達成感につながったのかなと思います。

——慶応は負けない。秋もそんな空気を感じました。チーム作りは順調でしたか？

いいえ。かなり苦しかったです。特に夏はチーム状態が全然上がらなかった。春にリーグ優勝
と全日本選手権優勝を目標に掲げて、それを達成したところで、チームとして向かうべき方向が
見えなくなりました。秋のリーグ戦の途中まではかなり苦しくて。8～9月の2カ月くらい、不透
明な時期が続きました。

——優勝した後は、多くのチームが「慢心」「過信」に苦しむと聞きます。チームの空気をどう
感じていましたか？

慶大の堀井哲也監督が目指すチームの2本柱は「環境整備」と「生活習慣」です。スリッパを
そろえるとか、練習後のグラウンドにボールが落ちていないとか。春の前に色んなルールを作
ったり、取り組みを変えたりした結果が日本一でした。そこに少し緩みが出ました。球が落ちて
いたり、心なしかベンチが汚かったり、靴がそろっていなかったり。

——福井主将なりに出した答えは？

基本に立ち返ることでした。環境整備と生活習慣。これをとことん2本柱にしようと。リーグ

戦に出る「A チーム」が率先して草むしりをする期間を作りました。秋のリーグ戦中です。2週間くらい。グラウンドの周りを区分して、ベンチに入りそうな選手 30 人くらいで。草むしりは、基本的に1年生が担っていたことです。

—これを試合に出るメンバーがやる意味は？

下級生がやってもいいんでしょうけど、僕たちがやることにデメリットはない。けがをするわけでもないですし。環境整備、生活習慣を掲げているなら、最前線で戦う選手がやるべきではないかと思いました。

—実際、やってみて。

選手間で気を配れる選手が増えてきました。「ちょっとあそこ汚くないか」とか、「もうちょっと掃除をしたほうがいいんじゃないか」とか。そういう声かけが生まれてきたので、よかったなと思います。

—野球にもつながる？

ずっと目指してきたのは「勝ったからチーム状態が良い」じゃなくて、「チーム状態が良いから勝つ」ということ。ここは絶対間違えちゃいけない。雰囲気すごい良くて、全員で勝ちに向かった結果が勝利。感覚的な部分ではあるんですけど、環境整備の取り組みを見直したことでチーム状態が上がって、優勝という方向に向かうきっかけになったと思います。

—福井主将になって、環境整備はもちろん、下級生に練習の先導役を任せるなど、改革を行いました。振り返っていかがですか。

1年生の頃からリーグ戦の優勝を経験させてもらいました。でも、勝っても全員で心の底から喜べない、みたいなことも実はあったんです。試合に出ている選手だけが優勝を喜んでいる、というか。今年は試合に出ている、出していないに関係なく、173人の部員全員で勝ち、負けも含めて共感し合えたと思います。

—最後の試合となった明治神宮大会決勝で印象的なのは、笑顔の福井主将とは対照的に、3年生以下の選手が泣いていたことです。大阪桐蔭高のときもそうでしたが、福井主将が作るチームは最後、下級生が泣く。

そう言われると、そうですね(笑)。ああいう姿を見ると、信頼されていたのかなとか、一緒にやれてよかったなという気持ちになれます。来年はやってくれるんじゃないか、と思えるし、後輩たちに何かを残せたんじゃないかなとも思えます。

—次の代にいい伝統を残す。すごく難しいことですが、そこは意識したのですか？

チームスローガンは「継勝」でした。つないで勝つという意味なんですけど、この言葉には「継承」の意味も込められていました。この1年だけじゃなくて、5年、10年先まで「あの代があったから今がある」と言ってもらえるような礎を築く。そういうことをすごく意識しました。

2017年の選抜大会を制し、優勝旗を持って場内をまわる大阪桐蔭高時代の福井
大阪桐蔭高時代の福井(右)



—だから下級生にも練習から責任を持たせた。

そうですね。全部が全部、最上級生がやると、僕らが抜けたあとに「何してたっけ」とか、方向性が分からないという状況に陥りやすい。横で一緒に引っ張ってあげることで、次の代になったときに「あのとき福井さんたち、こうやっていたな」と気づけると思うので。

—下級生で、気にかけていた選手は？

2年生の広瀬隆太(慶応高出身の内野手)ですね。かなり、がみがみ言いました(笑)。下級生なので、基本



的には打つ、守るという自分のことをやればいいんですけど、全力疾走とか声を出すとか、チームで徹底していることができていないときは厳しく言いました。ベンチに入っていない選手が納得しない姿ですよ。ベンチ外の仲間から応援される選手を目指そうって。それに気づくことができれば、広瀬も成長できるし、次の代もよりいいチームを目指せる。プレーは抜群なので。

——広瀬選手は神宮大会の決勝で本塁打を放ちました。

決勝後の取材でうれしいことがありました。広瀬に対して「この負けを次にどう生かしますか」という質問が出たときのことで。広瀬が「4年生にたくさん良い経験をさせてもらった。来年からは上級生なので、僕がチームに色んなことを還元して引っ張っていきたい」と言ったんです。うわー、成長したなって思えて、泣きそうになりました。ちゃんと響いていたんだなって。

(構成・山口史朗)

朝日新聞
DIGITAL

福井章吾・前主将インタビュー

後編

慶大・福井を救った監督の言葉

2022年1月12日

「史上最高」の主将でも悩んだ日々

大阪桐蔭高で2017年の選抜大会を制し、「大阪桐蔭史上最高の主将」と呼ばれた福井章吾さんのインタビュー後編。高校、大学と「部活動」に取り組む中で、何を得て、何を学んだのか。福井選手が考える、部活動の意義とは。

——福井主将からはよく、「173人の部員全員で」という言葉が出ます。野球で試合に出るのは9人。交代を入れても十数人。なぜそこまでメンバー外の選手が大切なのですか？

出ている選手が最大限に力を発揮するには、味方の選手にあと押しされないダメだと思っています。慶大は部員が173人。試合に出るのが10人くらいって考えたら、残りの160人が「野球部にいてよかった」って思えるには、僕たちが活躍するしかないと思っています。その「交換」というか。9人がまず、部員全員から応援されること。そして、応援してくれる仲間への還元は、勝つこと。このやりとりが大事だと思います。

——大阪桐蔭高時代は部員が約60人。慶大は173人。まとめる難しさは違いましたか？

違いましたね。大変でした。大阪桐蔭は中学まで全員、トップクラスで野球をやっていたという共通点があります。それに対して、慶大は色んなバックグラウンドを持った選手がいます。百八十度違うチームをまとめた感じでした。

——一番しんどかった夏から秋のリーグ戦の途中まで、支えになったのは？

9月25、26日の明大戦が終わった後、10月16日の立大戦まで3週間、あきました。立大戦の少し前に堀井哲也監督の部屋に押しかけたんです。ちょうど、メンバーの草むしりを始めたころでした。自分のやっていることが正しいのかどうか、分からなくて。「どうしていいか分からないです。頭が真っ白です」と。春秋連覇へのプレッシャーもあって。自分の練習にも身が入らなかった。1時間くらい、悩みをぶつけました。

——監督からは？

「リーダーは孤独でなければいけない」という話をされました。堀井監督は社会人野球でも監督をやられて、「相談相手がいなかった」「自分で壁を乗り越えていくしかない」という話をされて。ただ、監督はこうも言ってくださいました。「お前はリーダーだけど、おれがいる」と。孤独じゃないぞ、お前にはおれがいるんだぞっていうのを言っていた。すごい気持ちが晴れました。最後、監督の部屋を出るときに「絶対、胴上げします」と、心の底から言えました。

——きつい練習や、主将としての苦勞。高校、大学と「部活動」で野球に取り組んできて、何を得て、何を学びましたか？部活動をやる意義とはなんだと思いますか？

もちろん、スポーツをやる以上、勝つ喜びと、負ける悔しさを味わうことはすごい大事だと思います。でも、僕はそれ以上に**仲間とのつながり**を学びました。僕はほかのチームの選手とも仲良くなるんですよ。相手をリスペクトする精神。戦っている時は敵だけど、試合が終われば、同じスポーツをやる仲間なんです。秋のリーグ戦の選手宣誓で「スポーツは世界の共通言語である」と言いました。まさにその通りで、同じスポーツをやっている選手、同じ部活をやっている選手は絶対につながると思っています。会話をしなくても、スポーツ自体が共通言語。あとはあいさつ、感謝の気持ちなどの人間的な部分。部活動の**目的は、人格形成**だと思っています。

——明治神宮大会決勝のあいさつで、中央学院大の選手に「ありがとう」と言っているように見えました。

「おめでとう」とも言ったんです。「おめでとう」と「ありがとう」。捕手をやっても、相手の打者の1打席目は「よろしく」って絶対言うようにしていて。1番から9番まで全員にです。一緒にスポーツをやっている選手なので。そこは自然と出る言葉です。高校のときから言っていましたね。

大阪桐蔭高時代の福井。3年春の選抜大会で優勝した

——「大阪桐蔭史上最高の主将」と言われて大学に入りました。プレッシャーはなかったですか？

最初は「大阪桐蔭」という肩書がのっかかってくる感じがありました。背負っているというより、のしかかっている感じでした。でも、2年生くらいでなくなりました。甲子園に出ることがすごいことじゃないって気づいたんです。甲子園に出ていなくてもすごい選手はたくさんいます。甲子園に出たのは、全然すごいことじゃない。ただ、野球を一生懸命やるのが大切だなって。それに気づいた2年生くらいから結果も出るようになりました。

でも、慶応でもキャプテンをやるというのは、最初から決めていました。絶対にやってやるって覚悟を持っていました。史上最高のキャプテンを目指そうとは高校のときも思っていないです。目指していたのは、「史上最強のチーム」です。そういう気持ちでやっていました。

——その結果、史上最高のキャプテンと呼ばれちゃったのですね。

今でも、自分では思っていないんですけどね（笑）。

（構成・山口史朗）

（黄地紋・林 莊祐）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

日刊スポーツ

2021年11月26日

RSS 野球をこよなく愛する日刊スポーツの記者が、その醍醐味、勝負の厳しさ、時には心が和むようなエピソードなど、さまざまな話題を届けます。



福井章吾がいてこそその慶大 キャプテンシーの源は 2つ上の“理不尽”な兄

慶大対中央学院大 準優勝に終わるも晴れやかな表情でカップを手にする
慶大・福井主将(撮影・野上伸悟)

<明治神宮大会：中央学院大 9-8 慶大>◇大学の部決勝◇25日◇神宮

ネット裏の記者席から見ていて、彼らしい姿だと感じた。8-9 で迎えた 9 回表、慶大最後の攻撃。福井章吾主将（4 年＝大阪桐蔭）は捕手の防具を着けたまま、ベンチ最前列で声援を送っていた。

「野球は何が起こるか分からないので、次の回も守る準備を。投手とのコミュニケーションも欠かさず、**最善の準備**をしていました」。裏の守りがあると信じた。だが、無死一、二塁をつくるも 1 点届かず。負けが決まると、ベンチの中でさっと防具を外し、あいさつの列に向かった。

東京 6 大学春季リーグ戦、全日本大学選手権、そして秋季リーグ戦と 3 冠を達成。明治神宮大会も準優勝と、史上 5 校目の年間 4 冠まで、あと 1 歩だった。この 1 年、慶大を取材する中で、強さの要は間違いなく主将の福井だと感じた。正木（ソフトバンク 2 位）や渡部遼（オリックス 4 位）といったプロ野球に進む選手もいるが、福井がいてこそその慶大だった。

選手としての能力だけでなく、捕手として投手を引っ張る力量や、主将としてチームをまとめる器がある。堀井哲也監督（59）は「**今すぐに監督になってもいいぐらい**」と評し、ある社会人野球の指導者は「彼を取れば、向こう 10 年は捕手を補強しなくていい」と言ったほどだ。

キャプテンシーの源は、どこにあるのか。大阪桐蔭でも主将として 17 年センバツ優勝。だから、慶大に入る前、既に名門で培われていたのだと思っていた。ところが、本人に聞いたら意外な答えが返ってきた。「小さい頃から、**何事も先頭に立つタイプ**でした。遊びでも、先陣を切ってやってました」。育った環境が大きかったという。

一番の遊び相手は、2 つ上の兄慎平さんだった。年の近い男兄弟、取っ組み合いは日常茶飯事。ただ、子どもの 2 歳差は大きい。腕力では勝てなかった。「兄は厳しかった。兄の理不尽に耐えたから、今があるんです」と笑って明かした。さらに、兄の同い年の友達。「いつも兄や、兄の友達と遊ぶことが多くて。同学年よりも先にいって、いろんな会話、経験値を得ました。そういうところから自信ができました」。小さい頃から**少し上の世代でもまれた**ことで、たくましが育まれた。だから「兄にはすごく感謝してます。負けず嫌いもあったけど、そこで強さを身に着けました」。理不尽？ な兄と張り合うことで、成長できた。

慎平さんは亜大で野球を続けたが、家業を継ぐべく、大学で野球はやめた。福井は「お前は野球を続けろ」と言われている。兄弟仲はいい。「兄の誕生日に電話したら、僕の電話で起きたらしいです」と、ほほ笑ましい。

試合に戻ろう。4 冠を逃した直後でも「キャッチャーが責任を負うべき点はいくつかあった」と、9 失点を冷静に振り返っていた。今大会、初戦は途中出場。コンディションは万全ではなかった。それについても「大会でベストに持って行けないのは、選手として、まだまだ力が足りないということ。今後に生かしたい」と受け止めた。卒業後は、名門・トヨタ自動車野球を続ける。将来の夢へ向かって。

「**野球の指導者**です。将来、慶応でやりたい。社会人で、まず結果を残して、いずれ、ここ（慶大）に声をかけてもらえたら、そんな幸せな人生はありません」。

いつの日か、福井監督として年間 4 冠の胴上げをされる日がー。今年の学生野球が閉幕し、そんな想像をした。

【古川真弥】

慶大対中央学院大 準優勝に終わるも、正木(左)らとともに晴れやかな表情で記念撮影に納まる慶大・福井主将(撮影・野上伸悟)



すべての著作権は日刊スポーツ新聞社に帰属します。